

マーケットからの招待状

神奈川県立厚木商業高等学校教諭 岩村 夏樹

1. はじめに

神奈川県立厚木商業高等学校は創立しまだ34年と歴史の浅い学校であるが、卒業生は10,000名を越え、地域に開かれた学校づくり、特色ある商業教育の発展を目指し、職員一丸となって取り組んでいる。

昨年夏、東京九段会館で行われた第55回全国商業教育研究大会において、本校は「現行学習指導要領に基づく教育課程の実践と検証」と題した論文の発表を行った。先駆けて地域や学生に行ったアンケートでは、簿記や情報処理などの伝統的な商業教育の一層の推進とともに、商業科ならではの新しい分野の教育体制の整備の必要性を要求する声が多数寄せられた。

今後学校教育において展開を求められる分野のひとつに金融経済教育がある。平成18年9月、金融庁から「学校における金融経済教育の一層の推進について」という文書が出された。その中で、金融経済教育を必要とする理由として、金利知識の必要性や個人の資産運用の重要性の高まりや様々な金融商品・サービスの多様化・高度化などが挙げられている。

限られた授業時間数の中で、上記のようなニーズを満たす授業を行うことはカリキュラム上も困難だが、金利についての知識を企業の資金調達コストの理解ととらえ、個人の資産運用の多様化という点と絡めて考えるのであれば、証券マーケットに焦点を当てた株式に関する授業はひとつの解になりうると私は考えている。

2. 実践事例としての「初めての株式」

本年度、本校では金融経済教育の具体案、モデルケースのひとつとして株式市場に焦点を当てた「初めての株式」を開講した。これは3年生を対象とした選択科目「課題研究」の中の一つである。募集をかけたところ、商業科、国際経済科、情報処理科

で合わせて40名以上の希望があったため、講座として成立させ2展開（商業科で1クラス、国際経済・情報処理を合同で1クラス）で行っている。週2回、それぞれ50分ずつである。

内容は基本的に両者共通だが、商業科では財務諸表を読み取る分析を、国際経済・情報処理科ではアルゴリズムを応用し流れ図を用いた分析や英文事例を扱うなど、展開に若干の差を出している。株式ゲームについてはルール・方法ともに共通であり、決められた期間の中で順位を決定する。

【初めての株式】（授業シラバスより）

<時間>週2回（火曜、木曜「課題研究」）

<授業の目標>

- ①株式を中心とした金融の基本的な仕組みの理解
- ②常識を疑い、自ら考える癖の獲得
- ③株式ゲームのグループワークの中で、一つ一つの売買行動に根拠を持たせる習慣の獲得

上記3つの授業目標を生徒に掲げている。毎回の授業を楽しみながら、株式を中心とした金融経済への関心を高め、社会科学にかかわるあらゆる物事に対し好奇心をもち、自らの頭を使って考え、根拠を持って行動を起こしていく姿勢を養ってほしいと考えている。

3. 「初めての株式」の問題意識

平成18年5月の「第8回金融経済教育懇談会」の自由討論において、すでに行われている金融経済教育の事例に対するいくつかの厳しい指摘がなされた。「基礎学力低下が問題になっている中で、金融教育をどう取り込むのか。」「株式投資の疑似体験はマネーゲームに終わってしまっているのではないか。」などである。この分野の実践事例は最近いくつかあるものの、実際に行うとなると上記指摘なども鑑みその展開は難しい。私は上記指摘されるような課題を少しでも克服すべく、展開において以下の

3点を気をつけている。

(1) 生徒たちが興味を持てる授業内容であること。

株式、金融というが高校3年生にとってはイメージし辛い分野である。そこで授業では、ニュースや新聞で目にする機会の多いトピックを提示し、自然に学習に入れるよう考えている。加えて、高校の授業の中で扱うにふさわしい、一定の社会科学的水準を保っているものを授業で扱うトピックとしている。

(2) 扱うトピック・法令等が最新のものであること。

金融商品取引法の施行など、昨今の法令・ルールの激変が授業計画の組み立てをいっそう困難にさせている。そこで、授業の前には一つ一つの事象を裏付けるルールや法令が、最新のものに則っているかどうか可能な限り文献調査してから授業に出す。

(3) 学習効果の測定・評価が可能であること。

最大の難所が評価の問題である。本校でも観点別評価が導入され「意欲関心態度」「思考判断」「技能表現」「知識理解」の4つの観点から生徒の学習効果を計る取り組みが教員にも課せられている。後ほど紹介するケーススタディーやグループでの株式ゲームなどの授業上の工夫を活かしながら、楽しい授業を展開したい一方で、いかに生徒の学習効果を確認するかという点は頭を悩ませる。生徒が納得する評価を行うことが可能でないと、少なくとも高等学校での授業としては成立しない。本稿ではそのための試案もいくつか提案したく考えている。

他にもいくつかの検討を必要とする課題はあるが、「本授業が単なる投資ゲームに終らず」いかに生徒にとって役に立ち、楽しい授業となるか、というのが私の本質的な問題意識である。2年間勉強した情報処理や簿記がいかに活きるのか、授業の中で少しでも体験してもらいたい。授業への目新しい工夫を凝らしはするが、あくまで高等学校のカリキュラムにおいて、金融経済の仕組みや企業活動の在り方などへより実践的な興味を持たせ、高等学校における商業教育の総まとめを行わせるという授業なのである。

4. 授業内容と進め方

授業50分間の使い方は大まかに以下の図のとおりである。株式や最新事例などの解説講義（クイズ形式）、事例検討や銘柄分析を議論形式で行うケーススタディ、株式ゲームを毎時間1セットずつ行う。

授業開始と同時に進行解説講義では、最初に日経新聞の記事などを提示し、最新の事例から基礎項目を解説するスタンスをとっている。扱う内容は、新聞やニュースを含む全てがテキストとなり得るが、最低限のよりどころに証券外務員試験の2種レベルを想定し内容を選んでいく。

その後は実際の事例検討、銘柄分析などの全員参加型のケーススタディを行う。下の図で言う前回の投資の反省などもここで行う。決められた答えのない経済現象について頭を使ってもらう訓練である。分析事例は生徒が興味をもてるものを選んでいく。

記事が読めて理解でき、最新の事例に関して友達やご両親に説明できるようになってほしいという願いもこめて、新聞の経済面を読むように話をしている。

ケーススタディーの後、残った時間を使ってグループごとに討議し本日の株式ゲームでの投資銘柄を決定する。話し合いは長い時間がかかるが、チャイムとともに各チーム全て終了というルールを設けている。

【今年度解説した事項】

- ・株式発行・株式購入ってどんなこと？
- ・株主のメリット：議決権・配当・優待
- ・証券決済と株券電子化の関係：T+3の仕組み
- ・IPT、PO：株式を公開するとは？
- ・株式分割：株主を増やすさまざまな工夫 など
- ・TOB・三角合併について・株券の電子化
- ・夜間取引・サブプライムローン など

5. 指導上の工夫

具体的な授業での取り組みを、いくつか紹介する。

(1) クイズ形式による基礎知識の確認と事例解説

上記のように、授業の最初を使って、株式そのも

	1 学期	2 学期	3 学期
開始～20分	解説講義 ケーススタディ	解説講義 ケーススタディ	<1年間のまとめ> 株式ゲームファイナル 論文執筆（論文指導）
25分～35分	前回購入銘柄のインタビュー 前回投資の反省とプレゼンテーション		
35分～50分	株式ゲーム（日本証券業協会）への投資		

の基礎知識の確認と最近の事例などの紹介を講義形式で行う。一方的に私が黒板の前で話すのではなく、クイズ形式で生徒の頭のウォーミングアップをさせるのがこの時間の目標である。

【最新の事例から扱ったテーマ】

「トヨタの最高決算」「TOBにゆれるブルドック」
「グッドウィルの事業売却」「NOVA問題」

(2) ケーススタディー

企業のニュースや決算報告書、事業報告書などを用いて銘柄分析を行うケーススタディをクラス全員で行う。単なるクイズでなく、こちらはあくまで議論であり、正解はない。結末は2クラスで違う場合もある。

【扱ったテーマ】 下記あくまで一例である。

「TOBによって日興グループはどう変わるか」
「オリエンタルランドの入園者数と株価の関係」
「トヨタの純利益と株価について」 など

問題提起を行って議論の口火を切るところまでは私が行い、その後の議論は生徒に任せる。数分間発言の準備のための時間をとり、その後に議論を始める。生徒の発言はカテゴリーごとに板書し、議論の方向性を生徒に視覚化する。議論中、私は司会進行・書記を行いながら生徒を観察し評価をつける。

【発言の評価】

- 評価①** 質問に対し適切な解答：
「思考判断」「知識理解」の評価
- 評価②** 議論を前進させる解答：
「思考判断」「技能表現」の評価
- 評価③** 新たな視点からの解答：
「意欲関心態度」「技能表現」の評価
- 評価④** 的外れだがユニークな解答：
「意欲関心態度」の評価

生徒の発言は以上のように分類し、その場で評価を示す評価カードを与え、彼らは授業後、プリントとともにそれを提出する。私はそれを生徒の各観点のポイントに振り分け、成績として集計する。大事なのは、発言した生徒にとってその評価がわかりやすいという点である。授業参加が評価には重要であることは、生徒と確認済みである。

【具体的事例】

<教師>「サブプライムローン 日本の株価にどう影響するだろう？」

(生徒A) 下がる。回収会社が倒産しそう (評価①)
(生徒B) 下がる。金融系企業に影響しそう (評価①②)

<教師>「ローンが回収できないと、なぜ困る金融系の会社や困る人がいるの？」

*証券化や派生金融商品の理解を狙う。
(生徒C) 権利を買っている人がいるから (評価①)
(生徒D) それが入っている金融商品そのものの価値が下がってしまうから (評価①②)

<教師>「金融系の会社はどうするだろう？」

(生徒E) 金融商品を解約したり売ったり (評価①)
(生徒F) 他のもの買う。為替取引とか (評価①③)

<教師>「為替だったらどんな取引をするだろう？」
(生徒G) アメリカがピンチだからドルを売る。円買い。 (評価①②)

<教師>「すると株価はどうなる？」

(生徒H) 輸出企業に不利だから、株価は下がる。
(評価①)

*この場合、株価が上がるという結論でも議論が正しく行われれば授業の目的は果たすと考える。

(3) 株式ゲーム

日本証券業協会主催の株式ゲームに5人ずつのグループで参加している。ここで大事にしているのは、意思決定から実行までの判断の過程において、グループで何をよりどころとして投資したのかという点の明確化である。具体的には、グループ討議の観察から議論の進行能力や発言能力を評価 (評価分類はケーススタディの際と同様) する。加えて討議の議事録を残してもらい、評価に加える。

(4) 情報公開

課題研究の中で行っている株式ゲームの結果、加えて株式に関する基礎的な解説については校舎内2箇所に掲示し、誰でも閲覧可能にしてある。授業参加していない生徒にも株式の面白さを感じてほしい。

【掲示板の内容】

- ① 株式ゲームにおけるチーム順位
- ② 1位チームのポートフォリオ
- ③ 株式ゲームの全国順位
- ④ 株式かわらばん：株式初心者のための解説

6. 今後の可能性

今後の金融経済教育の発展のために、授業展開上

のいくつかの提案をしたい。

(1) 教員間のネットワーク構築の必要性

まず、授業を担当する先生方で情報交換を行うネットワークの構築が必要だ。私もいくつかの授業の実践事例を参考にさせていただいたが、細かな部分をどのようにやっているのか実際にお尋ねしたい事例が多い。また、本稿で紹介した私の事例は経験の浅い未熟な教員による一提案だが、利用可能な部分は参考あるいは批判対象にさせていただけると幸いである。高校間だけでなく、小学校や中学校、ひいては大学の研究室なども連絡が取り合えるようになれば、この分野の授業の幅は広がっていくだろう。

(2) 企業・各種協会のサポートの広がり

授業を展開する上でありがたかったのが、金融経済分野の授業をサポートしてくださる企業や協会の存在だ。本授業の大きな柱とした株式学習ゲームは日本証券業協会が提供してくれる学習ツールだ。参加校も多く、ルールもわかりやすく参加も手軽で、生徒たちも楽しそうに取り組んでいた。次に証券会社の協力である。本校は野村證券株式会社の方に大いにお世話になった。何度も学校に足を運んでいただき、授業展開に貴重なご助言をいただいたことに加え、興味深い話を盛り込んだ1時間の生徒への特別講演を行っていただいた。最後に日経新聞社のストックリーグへの参加である。生徒たちの興味を引く教材を無償で多く提供いただいた。

(3) 科目「課題研究」の発展の可能性

商業科目「課題研究」は、他の商業科目に比べると大部分が教師の裁量に任された科目である。元来調べ学習、成果発表を本質としている。想定されるテーマや項目は数多くあるが、生徒の興味を引き、商業高校における3年間の学習の集大成となりうるものこそが課題研究であるべきで、ある意味で「総合実践」に近いものであると私は考えている。今後はたとえば金融教育に限らず、生徒が興味をひくものについて、教員が準備を行うことで、シミュレーションなど交えた生徒参加型の授業展開ができると思う。金融教育などの新しい分野への指導上の工夫はそのための試金石になろう。初めての株式のスタイルはそのひとつの提案でもある。

(4) 資格としての証券外務員

「資格取得の商業高校」ということで提案するのが「証券外務員二種」という資格試験である。全商主催の検定試験などに加え、より発展的な資格に挑

戦する生徒が本校でも増えてきている。証券外務員試験は誰でも受験可能であり、資格は自動継続される。また、金融業に携わる場合の必携資格であり有用性も高い。受験料が高価であるという難点もあるが、商業高校で勉強した生徒であれば合格は十分に可能であり、ぜひ生徒に挑戦してほしい試験である。

7. マーケットからの招待状

本稿でいくつか提案させていただいたが、私の願いは金融経済教育の広い普及と発展にある。それは大学卒業後の自分を採用し、社会人として有益な経験をさせてくれた証券の世界への恩返しであり、微力な自分が教育という世界で貢献できる唯一のカテゴリーであると信じているからだ。

授業準備には本当に時間がかかり、指導上の困難を感じることも多くあったが、商業科や周りの先生方に指導法、内容など多くのサポート、アドバイスをいただいた。また、前述したように授業の趣旨に賛同し、協力いただいた多くの企業や協会の存在がなければこの授業の運営は難しかった。そして今年度は手探りの授業ではあったが、興味を持って取り組む優秀な学生に恵まれた。まさに授業は生徒との相互作用であり、ともに構築していく共同作業であると感じた。

2008年1月4日、大発会の日経平均は終値が大納会終値と比べ616円安と大幅下落で始まった。株式や金融の世界にはルールはあっても正解はない。こんな時だからこそ、この分野の教育の必要性は高まるだろう。生徒たちに、証券マーケットという知的好奇心にあふれた世界の紹介ができ、彼らの思考力を実践的に刺激することが可能となれば、金融経済教育は一層前進するだろう。生徒を魅力と好奇心あふれるフィールドへ、そして商業教育を更なる発展へと誘うマーケットからの招待状を、今後も広く発信していくつもりだ。

<参考資料>

「現行学習指導要領に基づく教育課程の実践と検証」
(仲神、小川、岩村)

「学校における金融経済教育の一層の推進について」

「第8回金融経済教育懇談会議事要旨」

(上記2つ金融庁HPより)